

『袖海編』所記の日本語と日本文化

文教大学部学部 蔣 垂東

1. 清代前期日本研究の概観

明代、中日両国の間には様々な接点があり、嘉靖～万暦年間(1573～1620)の間だけで約70種類もの日本研究書が刊行された。一方、清朝(1636～1912)になってからは、1871年の「日清修好条規」が締結されるまで、両国間に公式な外交関係がなかった。1644年に北京に都を定めた清王朝は中国の統一を実現するのに約20年もの歳月がかかった。台湾を拠点に清廷と対峙する鄭氏一族を中心とする抵抗勢力を一掃するため、清王朝は1651年から海禁政策である「遷海令」を發布し、大陸側住民の海上貿易と海外渡航を厳しく制限、1682年の台湾統一まで約30年間続いた。同じ時期の日本は、日本人の海外渡航を禁止し、中国とオランダの貿易船の長崎への入港のみを認める鎖国時代に入った。1682年鄭氏一族の清廷への帰順、1684年「台湾府」の設置や「遷海令」の撤廃に伴って、長崎に入港する中国の貿易船(唐船)が急増した。長崎に来航する中国人は当初市中での雑居が認められたが、キリスト教の流入や抜け荷(密貿易)などを防ぐため、1688年に中国人専用の居住施設唐人屋敷が整備され、貿易船で来航する中国人はここで集中管理され、行動が厳しく制限された。このような状況の中、中国に伝わる日本の情報が極端に少なくなり、18世紀に成立した日本研究書の主要なものは『海国見聞録(東洋記)』(1730年自序)、『長崎紀聞』(1735年自序)、『袖海編』(1764年自序)の三つのみだった。その中で『袖海編』は中日間で往来した貿易商が長崎唐館(唐人屋敷)滞在中に、自らの見聞に基づいて唐館とその周辺のことについて書き上げたもので、当時の日本を知る第一次資料として価値が高い。

2. 『袖海編』について

2.1 著者について

著者の汪鵬については、『杭州府志』巻一百四十三「義行三」に次の伝記が見られる。

汪鵬、字翼倉、仁和人。慷慨好施予朋好中孤寒者助膏火以成其名、親串有婚嫁不克举者成全之。嘗泛海往来浪華島、購『古本孝経』『皇侃論語疏』『七経孟子攷文』流伝中土、後歿於舟中。…以下略、

ここからは、汪鵬について(浙江銭塘)仁和の人で、友人や困った人を好んで助けることで名が知られ、日本との間を往来し中国本土で逸失した『古本孝経』『皇侃論語疏』『七経孟子攷文』を購入して持ち帰ったことでも有名で、船中で死去したということが分かる。

汪鵬は一商人だが、詩と画にも長じていたようで、『全浙詩話』と『清画家詩史』にもその事績が見られる。『全浙詩話』巻五十に、

汪鵬、字翼蒼、号竹里山人、銭塘人、客遊日本。著『袖海編』

との紹介があり、『袖海編』からその詩1首を引用している。また、『清画家詩史』に

汪鵬 字翼蒼一作翼昌、号竹里山人、銭塘人、以善画、客遊日本垂二十年歳一往還、

未嘗或輟、喜購古本書籍歸呈四庫館或付鮑渌飲與阮芸台伝刻行世有褻海編

とあり、汪鵬について「善画」という情報の他に、二十年に1回日本に渡っていたことを伝え、汪鵬が自ら三回日本に渡ったと述べたことと符合している。

汪鵬は日本側の文献にも登場している。江戸中期の儒者平沢元愷(1733－1791)が安永三年(1774)から翌四年にかけ、長崎奉行桑原能登守盛員の随員として長崎入りして、積極的に唐商と接触し、時には筆談、時には通事を介して聞き書きに精力的に当たっていた。その時のやり取りを『瓊浦偶筆』に残し、巻二はほぼ汪鵬とのやり取りで終始している。

余ノ嘗テ聞クニ、唐商ハ多ク人ヲ瞞シ、言説信ズルニ足ラザルナリト。独リ汪竹里ナル者ハ、其ノ人信慙ニテ、亦タ読書ヲ好ミ、其ノ言足ル。践ム可キナリ。今茲ニ幸イニ此レヲ留ム。因テ訳司ニ就テ、畜ウル所ヲ問ウニ、実ニ惑イヲ解ク者多シ。

その中で、汪鵬は唐商の中で人柄がよく、見識も高いとの評判を伝え、通事を介して行った汪鵬との対談では多くの収穫があったと満足している。

2.2 テキストについて

『袖海編』一卷は、『昭代叢書』続編戊集¹巻二十九と王錫祺(1855～1913)の『小方壺齋輿地叢鈔』第十帙に収録されている。『昭代叢書』続編所収本末尾にある続編の編者楊復吉(1747-1820)の「袖海編跋」が、続編の所収本は知不足齋の主人鮑以文(1728—1814)にある汪鵬の手稿を抄出したものと説明している。『袖海編』には別名『日本碎語』の一本が存在する。梁玉繩(1745～1819)の『清白士集』巻二十四に『日本碎語』一卷が見られ、梁氏は序文で収録した経緯について次のように述べている。

吾杭汪翼滄賈於海外、著『日本碎語』一卷、亦云袖海編。……中略……余嘗慫慂鮑君以文刻入知不足齋書、尚未果。略採數則如左。

梁玉繩は鮑廷博(1728—1814、字以文)にその『知不足齋叢書』に『日本碎語』を収録するように勧めたが、聞き入れてもらえなかったため、同書を一部抜き出して自らの『清白士集』に収めることにしたと述べている。『袖海編』と比較すると、『袖海編』の内容を十数箇条抜き出していると分かるが、最後の一箇条に『袖海編』にない内容が含まれている。

余三到崎○(上に天、下が山)、未得一遊王都、曾因遭風漂至一処、遥望白石為白、真蓬萊、不知何国、恐未必是其都也。

この記述から、汪鵬が三度日本に渡ったということが分かる。

2.3 内容について

汪鵬の自序から、乾隆甲申(1764)長崎の唐館滞在中に、長崎で見聞したことを記録した

¹ 甲～癸の十集からなる。甲乙二集の編者は張潮(1650～約 1709)、丙集の編者は張潮と弟の張漸で康熙朝に刊行、続編丁、戊、己、庚、辛五集の編者は楊復吉で乾隆朝編集完了も未刊、彙補壬、癸二集の編者は沈懋愷で、道光朝に甲～癸の合集を刊行。

ものであると分かる。また、書名については、蘇軾の詩「我持此石鼎、袖中有東海」から意趣を得たとある。

内容は、唐館の環境、唐館内の宴会、長崎遊女、長崎の唐船貿易の仕組み、唐館内の媽祖廟をはじめとする唐人の信仰と館外のお稲荷、長崎の風土と生活風習、和室、葬祭、人倫、オランダ人貿易、中国から書籍の輸入、文房具、禁教、踏み絵、唐三大仏事、道教、稲佐山道場、花柳街、農業、気候、飲食の特徴、野菜・魚・花・果物・盆栽・鳥等多岐にわたっている。

その中で、日本の風習については中国との違いを念頭に観察しつつ述べている。例えば、飲食、宴席の場面では、

勘茶止二三分、酒杯如中国之茶碗蓋、勘必十分淋漓而止、少則為不敬。…中略…食不同器、器不互用…中略…戸外二履不入。有所使令、則拍手代呼、聞声而応（お茶は茶碗の二、三分のところまで注ぐ。杯は中国の茶碗の蓋のようで、たっぷり一杯に注がなければならない。少ないと失礼になる。食べる時、料理は同じ器に入れず、食器はそれぞれ別のものを使う。その靴で室内に入らない。用がある時は手を叩いて呼び、その音で返事が来る。）

と述べている。こうした風習は現在でも日本の特色としてよく取り上げられる。

また、中国にないものについては、子細に観察し、描写している。例えば、花見の場面では、桜の美しさに感嘆し、絶賛している。

桜桃較西府海棠色稍淡、実中土所未見者、花時微綴翠華、如積雪披霞、嬌而不艷、別有一種清皎之態、但花而不実。

（桜は実海棠に比べると、色が少し淡く、中国では見たことがない。花が咲く時。少量の青葉に花が映え、まるで白い積雪に霞がかかっているようで、あでやかで美しいが、派手すぎではなく、清楚でさえわたっている。花を咲かせるが実を結ばない。）

さらに、物産などについて中国にあるものと比較しながら感想を述べている。

所嘗食時果、梅、杏、梨、柿、林檎、百合、橘、柚、黄柑最佳。桃、李如木、只堪糟脯。栗大而味淡、藕細而性硬、楊梅、桜桃、僅如鉅珠大、然甜而不酸、地上使然也。（食べた季節の果物では、梅、杏、梨、柿、林檎、百合、蜜柑、ユズが最もよい。桃と李はまずく、漬物と干し物にしか向いていない。栗は大きい味がうすい。蓮根は細いが硬い。やまもととさくらんぼは腕輪の珠の大きさしかないが、あまくてすっぱくない。土地がそうさせているのだろう。）

このように、同書は18世紀中頃の長崎を舞台に日本の「生」の姿を伝えている。

2.4 後世への影響

日本研究史料としての『袖海編』の価値が早くから注目されている。中国では、19世紀前半最大の日本研究書の著者である翁広平(1760～1842)がその『吾妻鏡補』(1814)を著した際、『袖海編』を参考書の一つに列して繰り返し引用している。19世紀後半には地理関係の図書を中心とする『小方壺斎輿地叢鈔』に収録され、地理関係図書としての注目度の高さ

を表している。海外では、曹・張(2002)によると、同書は在北京のロシア東方正教宣教師の司祭で東洋学者の Tsvetkov 氏によってロシア語に翻訳され、1857 年に出版されたロシア駐北京宣教師員論集(全 4 巻)の第三巻に収録されている。同論集の 1～3 巻は、ドイツの学者によってドイツ語に翻訳され、2 巻として編集されて 1858 年にベルリンで出版され、かのカールマルクスの目にもとまったという。日本では、『清白士集』所収の『日本碎語』一卷は単行本として出版され東洋文庫に収蔵されている。また、戦前・戦後において多くの日本語訳が手掛けられた。戦前では、1940 年にオランダ人東洋学者ヴァン・ゲーリック(Robert Hans van Gulik、漢字名：高羅佩)によって全書が和訳され『東亞論叢』第二輯に掲載されている。戦後は、1962 年に実藤恵秀による全訳が「唐人屋敷」という題目で『外国人の見た日本 1 南蛮渡来以降』に掲載されている。この訳は 1966 年の『長崎県史 史料編第三』「汪鵬 袖海編」にそっくりそのまま転載されている。近時のものとしては、石原(1997)に全訳に近い解説があり、近世の日本研究に欠かせない史料となっている。

3. 『袖海編』所記の日本語

『袖海編』には日本語に関する情報があるが、日本語史料の観点からこれに言及した先行研究はまだ少ない。福島(1968)は、同書所記の日本語について次のように述べている。

音訳漢字による日本語としては、太由(遊女の太夫)、淡巴茹(煙草)、幾世留(キセル)、便道(弁当)、受百果(重箱)などが見られるにすぎない。

その中で、5 つの漢字で音訳された日本語の存在を指摘するに止まっている。

本発表の調査では、『袖海編』所記の日本語には二種類あるという結果が得られた。一つは、福島(1968)が挙げた「淡巴茹」のような例で、日本語のタバコの音を漢字で示したもの、すなわちは漢字を意味とは関係なしにその音を利用した日本語の音を注したものである。こうした漢字で音訳した日本語は上記の太由(遊女の太夫)、淡巴茹(煙草)、幾世留(キセル)、便道(弁当)、受百果(重箱)の他に以下のようなものがある。

撒羹(さけ)、撒觥之計(さかづき)、毯踏眠(たたみ)、腰辺(おび)、麻姑喇(まくら)、噶必丹(カビタン)、戛子(魚)(かつお)

もう一つは、日本語を日本の漢字表記のそのままを書くものであり、人名、地名以外のものとして次のような例が見られる。

守番、花街、町、町長、煙盆、一番、二番、挿番、看板、年行事、大通事、副通事、末席(通事)、稽古(通事)、家老、用人、石花、玉釘

日本語、特に音訳日本語の実態が明らかにされていないため、和訳などにおいて誤訳が生じ、同書の価値に陰を落とす事態が起きている。

例えば、和室について紹介する場面(下線は発表者による)で、

席地而坐、通国皆然、有及階及席之風。屋内徧鋪毯踏眠、

ござを地面に敷いて座るのは日本中がそうであり、身分により座る位置に違いがある。部

屋中は「タタミ」をしきつめていると述べているところの「毯踏眠」は「タタミ」の音訳であるが、高羅佩(1940)は次のように和訳している。

地ニ席シテ坐スハ、通国皆然リ、及階及級の風アリ、屋内編ニ毯ヲ鋪イテ踏眠ス

その中で、「毯踏眠」を「毯ヲ鋪イテ踏眠ス」と別々の語としてその意味を訳している。同じ個所の実藤(1962)の訳は次のようになっている。

たたみの上に、じかにすわる。それは日本中がそうである。したがって、部屋にはいれば、すぐに寝床があるという次第。室内には、もうせんをしきつめ、そのうえに寝る。

ここでも、「毯踏眠」が「もうせんをしきつめ、そのうえに寝る」と漢字の意味が訳されている。和室に絨毯やもうせんを敷いてその上に寝るという風習はたして日本にあったのか、これが事実なら汪鵬の記述の信ぴょう性を疑わざるを得ない。

また、音訳を訳さずにそのままにしている例もある。例えば、日本の海産物について述べる部分では、次のような記述が見られる。

又有憂子魚、段而乾之、是為上産、近亦抵貨。

また、かつおという魚があり、これを段にして乾かしたものが上等な土産物で、近く商品の交換に用いられているという意で、「憂子(魚)」は「かつお」にあたるものである。高羅佩(1940)が「憂子魚」を訳していない。

又憂子魚アリ、段シテ之を乾シ、是ヲ土産トシ、近ゴロ亦抵貨ス。

また、次のように、石原(1997)も「憂子魚」を取り上げているが、その対処に苦悩している様子が見える。

憂子魚(? 憂はホコ)は乾わして土産物にする

4. 『袖海編』所記日本語の史料的价值について

同書記載の日本語は、数は決して多いとは言えないが、音訳漢字の用法には漢語方言と日本語音韻史の面だけでなく、日中語彙交流史の面でも示唆を与えてくれるものがある。

上に掲げた「毯踏眠」(タタミ)という例では、タに対する「毯」、ミに対する「眠」の用法は中国語の北方音からは適切な説明が得られにくい。なぜなら、中古音では「毯」は鼻音韻尾[-m]を有する咸摂、「眠」は鼻音韻尾[-n]を有する山摂に所属し、北京など現代北方音では、[-m]と[-n]は対立を失い、[-n]に合流したが、鼻音韻尾[-n]を維持しているため、タとミの音訳に不向きである。しかし、汪鵬の出身地が呉方言地区の浙江であり、咸摂と山摂の鼻音韻尾の消失が現代呉方言の代表的な特徴の一つであることを考えると、その用法は合理的なものであることが分かる。こうした「毯」「眠」の用法は、呉方言の咸摂と山摂の鼻音韻尾が18世紀に消失したことを反映している。

日本語に関していえば、幾世留(キセル)では、セに「世」が充てられている。「世」は中古音では審母蟹摂三等祭韻の所属で、北方音では祭韻の韻母が止摂と合流して[i]になった

が、呉方言は合流せず、祭韻が[-ie]を維持している。呉方言に基づく用法はこの当時の長崎方言の「セ」が[je]であったことを示している。また、「戛子(魚)」(かつお)のツに対する「子」と「撒觥之計(さかつき)」のヅに対する「之」の頭子音はどちらも破擦音の精母[tʃ]であることは当時の長崎方言のツ・ヅの子音が破擦音であったことを反映している。

日中語彙交流史の観点からは、「戛子魚」(かつお)という語に注目すべきである。この語は、カツオの音に対応した音訳「戛子」とカツオの意味類別を示した「魚」から構成されている。即ち、「戛子魚」は音訳＋意識というハイブリット方式の語である。音訳＋意識は中国語の外来語によく見られる手法である。例えば、beer を中国語では「啤酒」と言う。「啤」は beer の発音に対応し、「酒」は beer の意味類別を示している。カツオの場合、全て音訳漢字だと中国語としては意味をなさないので、カツオの音を「戛子」と音訳した上、意味類別の「魚」を付けている。このように同書の「戛子魚」は日本語ではなく中国語として記載していると考えられる。『袖海編』の約 50 年後に成立した『吾妻鏡補』(1815)の「国語解」(中日対訳語彙)「禽獸蟲魚類」に「戛子魚 戛子河」が収録され、見出しである中国語「戛子魚」に対する日本語が「戛子河」が示されている。この「戛子魚 戛子河」は 1884 年成立の『東語簡要』にも見られる。このことから、「戛子魚」は日本語由来の外来語で、唐船貿易時代、中国の貿易商の間で一般的に通用していたことが考えられ、近世の日中語彙交流史上の興味深い例と言えよう。

以上のように、『袖海編』は 18 世紀の日本の「生」の事情を知る貴重な資料であるだけでなく、言語資料としても注目すべき価値があるということが言える。

主な資料・参考文献：

- 石原道博(1977)「清代汪鵬の日本美術文化論」『茨城大学五浦美術文化研究所報』第 6 号、pp.9-24
高羅佩ヴァン・グーリック(1940)「乾隆時代—支那人の日本観」『東亞論叢』第二輯、pp.277-296
翁 広平(1814)『吾妻鏡補』『国家図書館蔵歴史档案文献叢刊』所収本
汪 鵬(1764)『袖海編』上海古書出版社 1990 年刊『昭代叢書』所収影印本、pp.1079-1083、
上海著易堂 1891 年刊『小方壺齋輿地叢鈔(第十帙)』鉛印本、pp.269-273
王 庸(1947)「明代海防図籍録」『中国地理図籍叢考(甲編)』上海商務印書館、pp.92-484
汪 翼滄『日本碎語』(日本刊本)東洋文庫所蔵本
龔嘉雋他(清)『杭州府志』卷一百四十三(『中国方志叢書・華中地方・第 199 号』所収影印本)
さねとう けいしゅう訳(1962)「唐人屋敷」『外国人の見た日本 1』筑摩書房、pp.157-173
実藤 恵秀訳(1966)「汪鵬 袖海編」『長崎県史 史料編第三』吉川弘文館、pp.309-321
蔣 垂東(2007)「清末の日本語会話書『東語簡要』」北京大学『日語語言文化研究』第 7 輯
蔣 垂東(2020)「中国資料の語彙」『シリーズ＜日本語の語彙＞3) 中世の語彙 —武士と和漢混合の時代—』朝倉書店、pp.177-192
曹天生・張琨(2002)「王茂蔭被馬克思写進『資本論』史実考」『徽学』2002 年第 1 期、pp.265-288
陳 倫炯(1730)『海国聞見録』上海古書出版社 1990 年刊『昭代叢書』所収本、pp.1050-1071
童 華(1735)『長崎紀聞』『北京図書館古籍珍本叢刊 79(童氏雜著五種)』所収本、pp.796-801
陶 元藻(1796)『全浙詩話』(中華書局『中国文学研究典籍叢刊』所収俞志慧点校本、p.2464
平沢 元愷(江戸)『瓊浦偶筆』(叢文社 1979 年刊『北方未公開古文書集成』第二巻所収本)
福島 邦道(1968)「清代の日本語研究」『纂輯日本訳語』京都大学国文学会、p.233
李 浚之(1930)『清画家詩史』中国書店 1990 年刊『海王邨古籍叢刊』所収本、p.227
梁 玉繩(1800)『清白士集』巻 2、天津図書館本